

【絵巻「竹取物語」下巻第5段】

―かぐや姫の昇天―

かかるほどによひ打過うちすぎて、祢ねのこくはかりに、家のあたりひるのあかさにもすきて、ひかりわたり、も望ち月月のあかさを十あはせたるはかりにて、有ある人の毛のあなさへミゆるほとなり、大空より人雲にのりておりきて土より五尺はかりあかりたるほとにたちつらねたり、内外なる人の心ともモノにおそハるゝやうにて相た戦ゝかハんころもなかりけり、からうしておもひおこして、弓矢をとり立てんとすれ共ども、手に力もなくなりてなへかゝりたる、中に心さかしきものね念んしてい射んとすれとも、ほかさまへいきけれハあれもたゝかはて、心地たゝしれにしれてまもりあへり、たてる人ともハ、さうそくのきよらなる事、物にも似すと飛ふ車つ一具したり、らかいさしたり、其中に王とおほしき人、宮つこまる家にまうてこ、といふにたけくおもひつるみやつこまるも物に急いたるこゝちしてうつふしにふせり、いはく、汝おさなき人いさゝか成くとくをおきなつくりけるによりて汝かたすけにとてかたときの程とてくたしゝをそこらの年頃、そこらのこかね給ひて、身をかへたるかことくなりけり、かくやひめハつミをつくり給へりけれハかく

いやしきをのれかもとにしハしおは  
しつるなり、つミのかきりはてぬ  
れはかくむかふる、おきなハなきなけ  
く、あたハぬ事也、はやかへし奉れ  
といふ、おきなこたへて申、かくやひめ  
をやしなひたてまつる事廿余年  
に成ぬかた時との給ふにあやしく  
なり侍りぬ、又、こと所にかくやひ  
めと申人そおハしますらむと云、こゝに  
おはするかくやひめハおもき病をし  
給へハえ出おハしますまし、と申せハ  
其返事ハなくて屋の上にとふ<sup>飛</sup>  
車をよせて、いさ、かくやひめきた  
なき所にいかてか久しくおハせんと  
いひ、たてこめたる所の戸、<sup>すなわち</sup>則たゝ  
あき<sup>開</sup>にあきぬ、かうし共も人ハなく  
してあきぬ、女いたきていたるかく  
やひめと<sup>外</sup>に出ぬ、えとゝむましけれハ  
たゝさしあふきてなき<sup>泣</sup>おり、竹と  
り心まとひてなきふせる<sup>ところに</sup>所より<sup>寄</sup>  
てかくや姫いふ、こゝにも心にもあらで  
かくま<sup>罷</sup>かるにのほらむをたに見<sup>送</sup>を  
くり給へ、といへとも、何しにかなしき  
に見<sup>送</sup>をくり奉らん、我をいかにせよ  
とてすてゝハのほり給ふそ、くし<sup>具</sup>  
て出ておはせね、となきてふせれハ  
御心まとひぬ、文をかき<sup>書</sup>をきてまか<sup>罷</sup>  
らん、こひしからん<sup>折</sup>おりく<sup>々</sup>取出て、見  
給へとて、うちなきて書ことはハ、此  
国に<sup>生</sup>むまれぬるとならハ、なけかせた  
てまつらぬほとまで侍らて過わかれ

ぬる事、返す／＼ほゐなくこそ覚  
侍れ、ぬき脱をく置衣をかたみとみた

まへ、月の出たらん夜ハ見をこせ給へ  
みす見捨てて奉りてまかるそらよりも

落ぬへき心ちする、と書をく、天人  
の中にもたせたるは箱こ有、あま天の

羽衣いれり、又あるは不死のくすり  
入り、ひとりの天人云、つほなる御

くすり奉れ、きたなき所の物きこし  
めしたれハ御心地あしからん物そ、とて

もてよりたれはいさ／＼かなめ給ひ  
て少かたみとて、ぬき脱置衣ころもに

つゝまんとすれハ、ある天人つゝませ  
す、御そをとり出てきせんとす、

その時にかくやひめしハしまて、と  
いひ、きぬ衣きせつる人ハ心異ことに成なり、

といふ、もの一一こと言いひ置へき事有  
けり、と云て、文かく、天人をそしと心

もとなかり給ひ、かくやひめ、物しらぬ  
事なのたまひそ、とていみしくしつ

かにおほやけに御文奉り給ふ、あは慌  
てぬさまなり、かくあまたの人をた

まひて、と留めさせ給へと、ゆる許さぬ迎む  
かへまうてきてとりいて死ぬれ

はくちおしくかなしき事、宮仕みやづかえ  
つかうまつらすなりぬるもかくわ

つらハしき身にて侍れは心得すお  
ほしめされつらめとも、心つよく承は

らすなりにし事、めけなるも  
のにおほしめしとゞめられぬるなん

心にとまり侍りぬる、とて、

今ハとて あまの羽ころも きるおりそ  
きみをあはれと おもひいてたる

とて、つほ壺のくすりそへて頭中將を  
よひよせて奉らす、中將に天人とり  
てつたふ、中將とりつれハ、ふとあま天  
の羽ころもうちきせれりつれは、お翁  
きなをいとをしかなしとおほしつる  
事もうせぬ、このきぬ衣きつる人ハ、物お  
もひなくなりにつれハ、車にのりて  
百人はかり天人具して上りぬ、其後  
おきな女血ちのな涙みたをなかしてま  
とへと、かひなし、あの書をきし文  
をよみてきかせけれと、何せんにか  
命もおしからん、た誰かためにか何事  
もようもなし、とて、

くすりもくハ食す

やかてお起きも

あ上からて

や病み

ふ臥せり

【絵巻「竹取物語」下巻第6段】

—ふじの煙—

中将、人々ひきくして帰りまいりて、  
かぐや姫をえたたかひとめすなりぬる  
をこまくとそうす、くすりのつほ  
に御文そへて、まいらす、ひろけて御覧  
して、いとあはれからせ給ひて、物もきこし  
めさす、御あそひなともなかりけり、  
大臣上達部をめして、いつれの山か天  
にちかき、ととはせたまふに、ある人そ  
うす、するかの国にあるなる山なん、この  
都もちかく天もちかく侍る、とそうす、  
これをきかせたまひて

あふことも なみたにうかふ 我身には  
しなぬくすりも 何にかはせん

かの奉る不死のくすりに文つほくして、  
御使に給ハす、ちよくしには月のいは  
かさといふ人を召てするかの国にあなる  
山のいたゝきにもてつくへきよし、仰給ふ、  
みねにてすへきやうをしへさせ給ふ、御文  
ふしのくすりのつほならへて火をつけ  
てもやすへきよし仰給ふ、そのよし承て  
兵者もあまたくして山へのほりける  
よりなん、其山をふしの山とは名付  
ける、そのけふり、いまた雲の中へ立ち  
のほるとそ、いひつたへたる